

イングリッシュルームによる英語教育改革

ジュリアン バンフォード (文教大学情報学部)

高橋 雅人 (フリーランス)

Improving English Education with an English Room

JULIAN BAMFORD (Faculty of Information and Communication, Bunkyo University)

TAKAHASHI MASATO (Freelance)

要旨

2003年文部科学省策定、「英語が使える日本人」の育成のための行動計画にもあるように21世紀に求められている英語スキルは国際語コミュニケーションスキルとしての英語である。この社会から要求に応えるための方法の一つとしてイングリッシュルームの存在価値、基本的役割を正しく認識し行動することは大学が求められている社会への人材育成につながる。

Abstract: This article examines how to make an English Room as an environment that increases students' motivation to study English, and encourages them to use English outside the classroom. Moreover, it explains that setting up such an environment can be low-cost. While our experience and discussion is based on work at Bunkyo University Shonan Campus, we feel the principles can be applied to any level of education, from elementary schools to adult extension education and community centers.

Why an English Room is necessary

なぜイングリッシュルームは必要か

2003年文部科学省の「英語が使える日本人」の育成のための行動計画は「21世紀を生きる子供達にとって、国際的共通語となっている「英語」のコミュニケーション能力を身に付けることが必要である」という基本理念に基づき文部科学省が策定したものである。この行動計画の中で大学は「大学を卒業したら仕事で英語が使える」ということと、「各大学が仕事で英語が使える人材を育成する観点か

ら、達成目標を設定」という二つを求められている。我々は昨今における企業や社会からの要望から文教大学湘南キャンパスでの英語能力達成の指数としてTOEICテストにおける600点が適当であると考え。より動機付けの高い学生にはTOEICテストの700点が適当と考え。(高橋、バンフォード2005a)

文部科学省はこの行動計画の中で「実際にコミュニケーションを目的として英語を運用する能力を習得させるために英語の授業においては、文法訳読中心の指導や教員の一方的

な授業ではなく、英語をコミュニケーションの手段として使用する実践的な授業が必要である。」と述べている(2003,p.3)。実践的スキルは頻度の低いトレーニングよりもより頻度の高いトレーニングを行うことにより発達していく(Spitzer, 1999, p.205)。これは文部科学省によるところの「英語をコミュニケーションの手段として使用する活動を積み重ね」(2003,p.3)である。学生が実践スキルとしての英語能力の向上を期待されているならば、必然的により多くの英会話を実践する機会やその学習機会、英語に慣れるための機会が必要であり、これらの機会を使うべきモチベーションも必要となる。

文教大学情報学部を含む多くの日本の大学の学部にとって現在稼働しているカリキュラムの中に新規に実践的英語スキル習得のための授業枠を設けることは不可能に思われる。TOEICテスト600点やTOEICテストの700点を英語能力向上達成目標と設定するならば、カリキュラム外での英会話を実践する機会や学習機会やモチベーションを高める機会を提供する手段の模索と提供が必要なることは明白である。

文部科学省は授業外での英語を実践する機会を増やすことを提唱している(2003, p. 7)。Michael Rostがこの潜在的な問題のより詳しい分析を行っている。「L2、第二言語を学ぶ環境では十分なインプット、ターゲット言語の供給に乏しく、英語で意思疎通を行うチャンスが十分でなく、英語学習を奨励していく力強いロールモデルに乏しく、そして英語を流暢に扱えるようになるという広い社会的な賛同も乏しい。」(2004, p.45)

15年前に我々は先に示したRostが指摘した、英語のインプットの増加、英語での意思疎通の機会の増加、英語学習奨励のためのロールモデル、広い社会的な英語を流暢に扱えるようになることに対する賛同を文教大学湘南キャンパスで実践できるかを調べてみるこ

にした。そして、我々は15年に及ぶこの問題に関する考察、観察、学生からの反応から一つの結論に到達した。イングリッシュルームはRostが指摘した事柄を埋めるべき環境を提供できる、但しイングリッシュルームが正しい方向で運営された場合のみである。

イングリッシュルームが正しく運営された場合、カリキュラムの授業では学生に提供することが著しく困難なものを学生に提供できることを我々は実感した。それは、学生一人一人が自分に合った方法で英語学習や英語を実践する方法を見つけ、発展させていくことのできる柔軟性がイングリッシュルームにはあるということである。このことの重要性に関してはPatsy LightbownとNina Spadaが二人の著書"How Languages are Learned."の中で「外国語学習者に学習スタイルを選択する自由が与えられると、その学習効果は学習スタイルを選択できずに自分には合っていない強要された学習スタイルのみで学習した外国語学習者よりも優れたものになる」(1993, p. 41)。

この外国語学習者に、より快適な学習環境を提供することのできるイングリッシュルームの設置には多くの資金やソフトは必要とされない。しかし、そこにはより細かい配慮と気配りが必要となる。以下に我々の15年に及ぶ研究結果に基づく幾つかの基本的事柄に関する提案をする。

How to make an English room

イングリッシュルームの作り方

学生にとり英語能力がより重要になると、学生はより英語学習方法に関して混迷を深める傾向にある。高等学校までの彼等の英語学習が学問的分析の強い傾向で、スキルとしてよりも試験での点数の向上が一番の目的であったことを考えればこのことは別段不思議なことではないように思う。そして、彼等が大学に入学し数年が経ち就職活動を真剣に始める

と、企業や社会から求められている英語能力が英語訳の仕方や文法知識ではなく実践英語コミュニケーション能力であることが明らかになる。そして実社会や企業内では他者のアイデアを英語で理解するスキルや、自分の感情を英語によりリアルタイムで表現するスキルを持つことが必要であることを理解する。

これらの実践英語コミュニケーション能力を習得するために、学生の多くは個人的アドバイスを必要としている。そして英語により慣れるため、学習をするため、英語をより多く使うチャンスを持つために学生がストレスを感じない、しかし刺激のある場所が必要になる。イングリッシュルームは以下に提示する二つのことを学習者に提供することが可能である。第一に実践英語コミュニケーション能力を発達させるための実践的助言。第二に英語という外国語により慣れる為の機会と環境。

カリキュラム授業の中ではどんなに改革的、民主的な英語教師でもリーダーとして授業の中心的存在となっている。しかし、このような英語教師の授業内での役割はイングリッシュルームには相応しくないものとなる。だが、この典型的な授業内での教え手としての役割と教わり手としての役割に別れを告げることは英語教師と学生の双方にとり難しいことと思われる。

「カウンセリング」と「英語を实践する機会」という二つの目的がイングリッシュルームに課せられていると仮定すれば、英語教師としてのイングリッシュルームでの役割、または使命は二つある。この二つはいずれも典型的な授業中における英語教師としての役割とは180度違うものである。例えば、英語教師はイングリッシュルームでは学習者を先導、コントロールすべきではない。これはイングリッシュルームの運営や管理を経験や知識もない学習者や学生に委ねるということでは決してない。

イングリッシュルームにおける英語教師の第一の役目は「カウンセラー」。利用する学習者一人一人と向き合い基本的な実践英語コミュニケーション能力の開発方法を提示並びに助言し、彼等に相応しい学習方法を共に模索していくという役目。第二の役目のイングリッシュルームの雰囲気作りのコントロールである。これは「実際に留学せずに留学をしているのと同様な環境、雰囲気」を作ることである。利用者（学習者）にとって魅力的な場所、利用したくなる場所にするための環境整備である。英語教師はイングリッシュルームの雰囲気や環境をコントロールするが、利用者（学習者）英語実践は一切コントロールしない。イングリッシュルームを利用する、しないは、利用者（学習者）に選択権がある。カウンセラー（先導者）と雰囲気（環境）をコントロールする（非先導者）という二つの異なる役割がイングリッシュルームの成功の最大の鍵となる。その詳細は以下に提示する。

The teacher as counselor

カウンセラーとしての英語教師

実践的英語コミュニケーション能力とは自分の考えや気持ちを他者に英語で伝えることができることを意味する。人間は一人一人好みや性格が違い、また外国語学習のスタイルも個人個人で異なる。人はそれぞれ異なることに興味を抱き、異なる能力に秀で、語学学習のスタイルも習得速度も異なる。これはウェイトトレーニングを例にすると容易に理解できる。ウェイトトレーニングを始める際の一番最初の負荷、トレーニングをする目的、モチベーションの度合い、トレーニングに費やす時間などには個人差がある。トレーナーはこれらの異なるファクターから総合的判断をし、各自に合ったトレーニングでの負荷の掛け具合や種類、頻度などを提案していく。イングリッシュルームにおけるカウンセラーも同様でなければならない。学習者一人一人

の特徴を把握し、各自が快適にこなせる学習計画を共に立て、学習者の学習の進行度、モチベーションの度合い等を見守る。

またこのようなカウンセラーには英語を母国語としない（日本人）英語教師が以下の理由から一番適切かと思われる。第一に、英語学習者の良きロールモデルであるということ。彼等自身もまた英語学習者であることから、過去の彼等自身の経験から学習者の抱える悩みやストレス、ニーズなどを容易に推察、または理解することが可能である。必要ならば日本人英語学習者に日本語でカウンセリングをすることもできる。

イングリッシュルームのカウンセラーがどんな助言を学習者にするかは、カウンセラー各自の学習経験、学習法に関する考え方に大きく左右される。多くのイングリッシュルームのカウンセラーは多くの学習者の成功例、失敗例を観察し、それらの原因の分析を繰り返した結果として少しずつイングリッシュルームのカウンセラーとして進歩していくものと思われる。

多くの英語学習者の場合、英検合格、TOEFLテストやTOEICテストでの成績向上のための助言も求める。これらのような目標を設定することは大事であるが、同様に大事なのはこれらのテストの先にある全ての学習者が目指すべき最終的な目標である。それは学習者が自分自身の英語学習の方向を自分で舵取りできる独立した上級学習者になるということである。学習者個々で目的は異なっても、このことは全ての学習者に伝えられなければならない。そしてイングリッシュルームではより様々な選択肢からなる刺激的で興味深い英語学習教材や英語学習方法を提示しなければならないと。イングリッシュルームでの雰囲気、環境作りとして英語教師に求められる役割については以下に示す。

The teacher controlling the environment

英語教師がコントロールする環境、雰囲気

イングリッシュルーム利用者の為に、この空間はバーチャルな海外留学を演出しなければならない。それはこういうことである。英語をコミュニケーションの手段として使用されなければならない、そこはイングリッシュルームではない。したがって、イングリッシュルームであるための潜在的な必要条件として、これが唯一の条件であるが、全ての利用者はイングリッシュルーム内では英語で話さなければならないということが求められる。

しかし、この「英語のみでコミュニケーションを図らなければならない」というシンプルなルールは初心者や英語でのコミュニケーションにまだ慣れていない者、また時に上級者にとっても遂行継続が不可能なルールになりかねない。そこでこのルールをより柔軟にせざるを得ない。英語と日本語（または母国語）を織り交ぜての使用により誰もが英語だけの意思疎通が可能となる。イングリッシュルーム内で「お腹がすいた」はルール違反になるが「I'm お腹がすいた」は許容範囲となる。そして、このような日本語と英語の折半の言葉はカウンセラーにより英訳されることは利用者からのリクエストがない限り行われない。そしてそのリクエストは定型の質問でされる。"How do you say お腹がすいた in English?" イングリッシュルームの利用者はまず始めにこの定型の質問を多くすることを奨励される。

英語と日本語を織り交ぜてコミュニケーションを試みることには幾つかの利点がある。まず「英語に対してのアレルギーを取り除き必要最小限の自信を身につける」ことが挙げられる。学習者に彼等の能力以上のタスクを課す場合、例えば英語のみで意思疎通を行わなければならない、するとそのタスクの習得が不可能に感じそのタスクは自分には合っていないと思うという状況がしばしば見られる。

しかし、そこに柔軟性を持って同様のタスクを課した場合、学習者はコミュニケーションそのものを中断することなく続けられ、続けられことによりタスク、英語での会話が自分達にもできるものであることを自ら確認できるのである。

柔軟性の高い英語のみでのコミュニケーションというルールを設定することにより、英語教師はイングリッシュルームの雰囲気、環境設定をすることになる。ここで注意をしなければならないことは、雰囲気、環境設定のコントロールと会話をコントロールすることは大きく違うということである。イングリッシュルームの中で英語教師は利用者同士の英語での会話を盛り立て、後ろ盾することはすべきであるが利用者同士の会話を先導、支配し、彼等から奪うことは決してあってはならない。しかし、このことはカリキュラム授業の中では教師中心となっているため学習者と英語教師の両サイドにとって理解することが大変難しい。

更に不幸にも日本では「英語を使って会話をする」という行為は自動的に「英語を母国語とする人と会話をする」という社会的固定観念が存在するように思われる。この考え方は文部科学省の行動計画の中にも垣間見ることができる。「学校いきいきプランを通じた英語に堪能な社会人等の活用や、ALT等の活用によって、学校を中心とした英会話サロンやスピーチコンテストなどの取組を促進する。」(2003, p.8)。しかし、英語をビジネスなどで使われる国際共通語として考えるならば、誰を相手に英語で会話をするかということは大きな問題となるようには思えない。サッカー日本代表でもある中田英寿選手が英国のチームであるボルトンワンダラーズに移籍をした時の最初の記者会見が現地で開催されたときに中田英寿選手は日本人記者に対しても英語での質疑応答を求めた。すると、日本人記者の一人がなぜ日本人同士で英語での質疑応答を

しなければならないのかと質問すると中田英寿選手は「ここは英語がスタンダードの国だからです。」と答えた。日本人同士による英語コミュニケーションは違和感を認めないが、我々の経験上それは最初だけであり直ぐにこの違和感は消え不思議なくらいフィットする。

学習者同士による英語コミュニケーションには他にも利点がある。英語学習の多くはネイティブスピーカーとの会話や自分よりも流暢に英語を使える他の学習者に対してある種のプレッシャーを感じる。しかし、相手の英語スキルが自分と同等である場合はそれを感じることなく英語でのコミュニケーションをとることが可能になる。これは母国語を学ぶ時の子供と同じ状況と言える。LightbownとSpadaによると「母国語を学んでいる子供達は上手に話す、正確に話さなければならないという観点はまるでない。更に子供達の母国語習得初期段階から行われる不完全な言葉でのコミュニケーションの試みは容認されている。」(Lightbown & Spada, p.42)。我々のイングリッシュルームの利用者である学生の一人は「ここは自分と同じ英語レベルの人と英語でお喋りできるので緊張せずに英語で話せる。」とコメントしている。

英語教師が学習者同士の英会話に参加する場合、先の学生のコメントにあることに注意を払い学習者の主体性を尊重すべきである。教え手、教わり手という上下の関係でなく、聞き手と話し手という平等な関係で学習者が理解できる言葉を丁寧に選択しコミュニケーションを取らなければならない。このことは一般的に特にネイティブスピーカーの英語教師が無意識に抱える問題である。

イングリッシュルームの英語教師の役割の中の一つに会話環境のコントロールがある。これは利用者との会話を意味するのでなく利用者同士の会話をサポートするためのトピックを提供することである。まず、基本的な自己紹介するための質問とその答え方。そして、

学習者が母国語で話していると思われる日々
の話題を質問にすることを推奨する。また、
利用者からの英語での言い回しについての質
問に対して迅速にガイドを与える。例えば
(How do you say “seiseki” in English?)
という質問に対しての答え。そして、消極的
な利用者同士を積極的に引き合わせ、会話を
始めるきっかけを作る。このきっかけさえ与
えられると彼等は自分達で英語を実践し続け
る。これは初級者であってもそうである。

一人の英語教師が我々のイングリッシュル
ームを訪れた時に日本人の英語学習者同士が
つたない英語ながらも英語で会話を行って
いる様子にとっても驚いた。それは彼の授業
ではなかなか見ることのできない光景であ
ったからだ。しかし、リラックスした状況下
では他のやる気のある学習者の影響やサポ
ート、会話のスタートとなる話題、英語で
の表現の仕方に関するサポート、英語と日
本語を織り交ぜての英会話の奨励、があ
ると英語学習者は自然に簡単に英語での
自己表現を繰り返すのである。

Native speakers and lots of money are not needed

ネイティブスピーカーと多くの資金は不要

日本人英語学習者に仕事で使えるだけの英
語コミュニケーション能力をもたらせるこ
とは大きなチャレンジである。この課題に
取り組むときに見られる二つの大きな過
ちがある。それはネイティブスピーカー
への依存と高価な道具への依存である。
学校などの教育機関は外国人英語講師
の雇用や高価なテクノロジーの設置に
関して多大な重圧を感じている。そし
て多くの子供を持つ日本人の親は日本
人学生は高価な海外留学プログラム
こそが英語コミュニケーション能力
を習得する手段であると思込んでいる。
我々の文教大学湘南キャンパス

での経験から、ここまで我々が提示し
てきたイングリッシュルームのモデル
で十分にこの課題を解決することが
少ない投資で可能である。

時にネイティブスピーカーの英語教師
はイングリッシュルームの中で期待し
ている効果と逆効果を生み出すこと
があることを我々は経験している。
イングリッシュルームの会話の中
でネイティブスピーカーの英語教師
が中心になると利用者は彼等と
だけ英会話をするために訪れる。
そして学習者は日本人同士では
日本語で話す。次第にダイナミッ
クな会話は影を潜め、ネイティブ
スピーカーは利用者からの無言の
期待を感じて会話をリードし先
導していかざるを得ない。すると、
多くのネイティブスピーカーは数
人の消極的な学習者の輪の中心
に座り、無意識な習慣から会話を
スタートすべき試みる。しかし、
自分の質問に反応よく応答して
くれるのはより積極的な英語
コミュニケーション能力の高い
学習者だけで必然的に他の消極
的で英語コミュニケーション
能力の高くない学習者は聞き役
となり、自分達の理解できない
会話の進行を黙って座り聞き
続けなければならない。これは
会話でなく拷問である。この状
況を解決するのに必要なのは
学習者一人一人にネイティブ
スピーカーをつけるということ
ではない。

ネイティブスピーカーがイングリッ
シュルームのような施設に居な
ければならないという考えの根
底にはネイティブスピーカーが
関わる時のみ英語が本物である
という幻想の影響があるように
思われる。これは我々の提唱す
るイングリッシュルームの姿と
はまったく反対のものである。
英語のコミュニケーション能力
の必要性が実社会からの要求
ならばその実情を反映しな
ければならない。英語は国際
共通語として英語を母国語と
しない人々同士の間で共通の
外国語として頻繁に使われて
いる。

高価な教材や機材を中心として
イングリッ

シュルームモデルも逆効果である。英語教育の改革という目的を達成するための方法の一つが多くの資金を注入しコンピューターを設置しランゲージラボラトリー環境を充実させるという考え方。しかし、これらの投資でコミュニケーション能力を实践、習得する場であるイングリッシュルームの設置準備が終了と考えている場合、その状況は投資した金額を反映されるものからはほど遠いことになる。なぜなら、これらの高価なハイテクノロジーは、学習者のコミュニケーション能力の向上や独立した上級学習者になるため直接必要なアイテムではなく、間接的にこれらの目標を達成すべき支援をするものである。なぜなら、言語とは人と人がお互いの意思疎通を図るために使われる道具、スキルだからである (Kandel, Schwartz & Jessell, 2000, p.1169)。

イングリッシュルームに必要な設備や教材についてだが、これはイングリッシュルームを新規にオープンした場合は何も無い状態でスタートし、少しずつ必要なものを利用者の要望に応じて整えていくとより利用者の使用しやすい環境をもたらすことが可能となる。我々のイングリッシュルームの場合、丸いテーブルが数個。これは利用者同士が会話をするときにお互い向き合うと話しやすいという要望と、当初しようしていたテーブルが教室内で使用されているテーブルと同じであったため英語の授業の気がするので嫌だという要望から変更した。ポットに無料のコーヒーや紅茶はほぼ毎日利用している学生から英語で会話をしていると喉が渇くから飲み物を用意して欲しいというリクエストによるものである。トランプ類のカードも利用者からの要望である。その他には、ビデオカセット、DVDプレイヤー、モニター、英字新聞、グレイディッドリーダーズ、100円ショップで売っているクッキーなど利用者の要望や我々の研究方針から供給している。しかし、これらのアイテ

ムがイングリッシュルームを運営するために必ず必要なものであるということではない。我々はこれのアイテムを必要に応じて一つずつ長期に渡り自分の予算内で購入、また学校から借りている。そしてこれらのアイテムは価格的に入手困難でなく、そして利用者にとって有用に映るからである。

我々の15年及びイングリッシュルーム改善の試行錯誤の中で最も劇的にイングリッシュルームをよりリラックスした雰囲気にし、利用者同士の英会話の促進を図ったアイテムは高価なコンピューターやDVDのボックスセットでもなくインスタントコーヒーとカードゲームのUNOである。利用者がUNOで遊びながら多くの質問を自ら見つけ、尋ねる。例えば、“How do you say “kuyashii” in English?” や “How do you say “zurui” in English?” などである。利用者はカードで友人と遊びながら自分達の必要な言葉について質問をする。そしてその質問は彼等の英語レベルにフィットしたものである。

Conclusion

結 論

イングリッシュルームのあるべき姿を簡単に述べるならば、それは学生食堂である。学生が自由に食欲を満たすため、友達に会うために、楽しくお喋りをするために行き来をする場所。学生食堂の用途は食事にある。しかし、このシンプルな役目はフレンドリーな雰囲気、選択の自由、居心地の良さなどのファクターが重なり達成される。イングリッシュルームも同様である。イングリッシュルームの用途は英語である。イングリッシュルームを設立、運営していく人間が柔軟かつ繊細であれば、フレンドリーな雰囲気、選択の自由、居心地の良さというファクターにより、そのイングリッシュルームは目的を達成していく。イングリッシュルームが利用者の日常生活の延長線上に存在できたときにのみイングリッ

シユルームは多く利用者を魅了し有用な施設となる。適切にイングリッシェルームが設立、運営されると、そこは利用者が英語でお互いのコミュニケーションを取る場所となる。その結果、彼等にとって英語が楽しく、難しくなく、便利でリアルな道具と変化する。

学習者に、より多く英語と関わる時間とお互いが英語で活動できるスペースを提供することにより、イングリッシェルームは学習者の英語コミュニケーション能力の向上とその自信を深めることに多大な貢献ができる。そしてイングリッシェルームは学習者各自に合った独立した上級学習者になるための過程と方向を見つける場所になる。そしてこれらは高価なハイテクノロジーを拒否し莫大な人件費を多くのネイティブスピーカー費やす代わりにわずかな資金と人件費で達成することができる。

実用英語会話クラスを教えることは技術、スキルである。これは様々な学生との関わりを通じ幾多にも及ぶ試行錯誤の先にあるものである。首尾良く機能するイングリッシェルームの設置、運営はとても繊細でデリケートなタスクであり、これは多くの試行錯誤を必要とする。我々の趣旨はこの記事の中でイングリッシェルームの詳細な設計書を作るのではなく、イングリッシェルームの基本的意図や機能を示すことである。それは私達人間が教え手、教わり手として一人一人が独立した異なるユニークな存在であるのと同様にイン

グリッシェルームやイングリッシェルームが属する各教育機関もまたそうあるべきであると考えからである。

References

- Kandel, E.R., Schwartz, J.H., & Jessell, T.M. (Eds.). (2000). Principles of neural science (4th ed.) NY: McGraw-Hill
- Lightbown, P. & Spada, N. (1993). How languages are learned. Oxford: Oxford University Press.[replace with Japanese version] MEXT. Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology.(2003). Regarding the establishment of an action plan to cultivate "Japanese with English Abilities." Retrieved July 8, 2004, from <www.mext.go.jp/english/topics/03072801.htm>
- Rost, M. (2004). Generating Student Motivation. *The Language Teacher*, 28 (12), 45-6
- Spitzer, M. (1999) *The mind within the net*. Cambridge, MA: MIT
- Takahashi M.,& Bamford J. (2005a) *Current Issues in English Education at Bunkyo University Shonan Campus*. 情報学部紀要、No.34.